

## 「環境・共生・協働のコミュニティ ― 教会の将来 ―」研究会

## 農村伝道論の備え

池迫 直人

## はじめに

この研究会の主題、「環境・共生・協働のコミュニティ——教会の将来」の初回で、発表を引き受けるに当たり、主題に呼応する内容を呈示できるのか、覚束ないながらも、わたし自身の現在に至るまでの自分史を振り返りつつ、時系列による区分にしたがって、それぞれ経験した諸問題をとおして随想として発表した。本稿はそれに付加、削除など修正を施したものである。内容の区分は、(1) グローバル経済（海運業の最前線で）、次に(2) 教会外の関連団体（学校法人アジア学院、日本基督教団関連団体：道北クリスチャンセンター）における宣教活動<sup>1)</sup>、つづいて、(3) 教会共同体、とくに地方教会（岐阜県田瀬教会、青森県田名部教会）において、最後に、(4) 農村伝道神学校にて農村伝道論をめぐる考察した内容からなる。

なお、本稿は、あくまでも自分史をもとにした随想であり、それに少しながら考察を加えたものである。そこで論じた内容は、それぞれに専門の領域が関わってくる。それらを十分に踏まえ、資料に当たるなどは、なしえなかった。拙速な考察にとどまっているところがあるだろう。看過できないお気づきがあれば、ご教示くださればさいわいである。

## 1. 農との出会い

「パパラギ」という本が、かつて巷に知られた。日本では'81年に出版されている。偶然にラジオの「朗読の時間」にこの本がとりあげられ、聴いたことを記憶している。これは、ツイアピと名のるサモアの酋長による演説と表しているが、実際には編者ショイルマンによる創作であるとされる。ショイルマンはサモアに一年間滞在した経験があるので、この本が創作であるとしても、そこに書かれている文明批判を看過するわけにはいかないだろう。

かくいうわたしは、船員養成のための大学、それも原子力船が商業化されることを前提に設立した学科に進み、その最終課程である遠洋航海実習で、日本を出て最初に訪れた国が西サモアであった。そこで、遭遇した人々は、「パパラギ」に

おいて文明社会に警鐘を鳴らす「ツイアビ（酋長）」の子孫たちである。東京湾の晴海埠頭から出て、太平洋を南下して辿り着いた南洋の島嶼国サモア、夜には南十字星がみえ、昼には頭上真上に太陽が昇る南洋の島、首都アピアの沖合に停泊し、上陸して、実習生の仲間たちと街中や浜辺を散策していて、木陰で涼んでいる人たちが手を振ってきたりするなど、第一印象は、漠然とイメージしてきたいわゆる南の島であった。

しかし、程なく、緑と青の平和で穏やかな、いわゆる南海の孤島というステレオタイプのイメージとは相容れない現実に直面する。首都アピアの街からそう遠くはない浜辺には、大きなホテルがあり、旧統治国アメリカからの観光客らしき大勢の人たちが、椰子の葉であしらったラウンジのテーブルで涼んでいた。わたしの隣にいた高齢の男性は、「俺の息子はあのロックグループ〇〇のドラムをたたいているよ。…、」など、いかにも南海の島で休暇を楽しむ映画の情景のようであった。ホテルを出るとサモアの人たちが、わたしたち東洋人に物珍しげに話しかけてくる。当時は、すでに JICA による青年海外協力隊の日本人は派遣されていた。サモアの人たちが持ちかけてくる話題はもっぱら「おまえはウォークマンを持っているか？」など電気製品やクルマのことなどばかりであった。数百軒しかない首都アピアのメインストリートには日本の大手企業の看板が散見された。日本の企業が、海外で知られるようになったことを聞き及んでいたが、こんなに小さな南洋の島までも進出しているのかと感心したものだ。

そして衝撃的なことが起こった。いぶかしげな笑みを浮かべながら近寄ってきた自ら 12 歳だという少年が、「ぼくのガールフレンドを一晩買わないか」と話しかけてきたのである。拙い英語力ゆえ、聞き間違いかと思い、仲間数人と顔を見合わせ、何度か聞き返したのだったが、…聞き間違いではなかった。わたしたちは絶句して互いに顔を見合わせたのだった。

いったい、だれによって、彼はそのようなしてお金を稼ぐ方法を、知り得たのだろうか。植民地として統治される以前のサモアがどんな国であったのかを、調べたわけではないが、このわずか 12 歳を数える少年とそのガールフレンドを、そういう行為、生き方に至らしめた根拠を歴史、構造的にさかのぼって問えば、キリスト教国の植民地主義政策に行き着かざるを得ない、この分野には多くの著書があり、推論でも十分だろう。

今では次のように整然とした言い回しをもって表現できるのだが、当時の驚きの出来事だけが、脳裏に刻まれた。卒業後数年は、海運業、多少なり勿体ぶった

言い方をすればグローバル経済の最前線で、本質的にこの問題、つまり人間がいとなむ経済活動において人間自身が、その恩恵に与りつつも、人間を疎外するということを経験した。

海運業に携わった年月を回顧する際に、今もその拘りから解かれぬ問題は、饑餓や貧困である。いくつか当時の記憶から事例をあげる、ある年、ペルシャ湾岸の五カ国が出資して立ち上げた海運会社に派遣された。その会社は、いわゆるオイルマネー、つまり原料の販売で得た利益から、利益を再生産するために創設されたのだと聞いた。船の建造は、当時世界に進出しはじめた韓国の大手造船所でなされ、艀装から運航まではすべて日本人に任されていた。米国東岸から南部、地中海、ペルシャ湾との間を航行する船では、アメリカで積み込まれたパソコンがシリアで陸揚げされていた。シリアの後スエズ運河を通過する傍らには、ソマリアがある。饑餓と海賊という言葉が、40年を経た今も、この国の名に連なっている。この当時、横浜で数時間の上陸がゆるされた際に、書店でふと手にした本をめくると饑餓にあえぐソマリアの人たちがその書のはじめから終わりまで撮られていた描写が今も鮮明だ、書名は「アコロ―喰うものをくれ！（プレイボーイ写真文庫）」だった。

船で働きながら、すぐ傍らにこんな現実があるのか、何とかできないものかと胸を痛めたものだ。わたしは昼間か夜中かも、分からない機関室での仕事ゆえ、航海士に尋ねると大洋を小さな船が行き交っているが、難民を乗せた船もあるかもしれないとのことだった。当時からソマリア付近のアデン湾は、海賊が出没する海域であり、非常用の消火ポンプをスタンバイしていた。特に、夜中に海賊がこっそり船にあがってきた場合に備えて、放水して撃退するためであった。今では、海賊もロケットランチャーなど武装を近代化しているようだ。その後、アデン湾に自衛隊が派遣されるようになり、当時の日本基督教団の中で議論されていた状況については、いつも複雑な心境であった。

また、その頃は、イラン・イラク戦争の最中でもあり、北米東岸～地中海～ペルシャ湾を航行する船に乗り組んだことも幾たびかある。あるペルシャ湾と北米を往復する船では、なぜか北米で積み込んだパソコンが、途中のシリアで陸揚げされる、それをめぐって乗組員たちは、憶測をめぐらせ、もっともらしい政治的妄想を茶飲み話で交わすなどしていた。後に乗り組んだ日本籍船では、船体の上部後半に大きな日の丸を描いていた。攻撃を免れるためである。

別の自社船では造水プラントを運んだ。海水を蒸留して真水をつくるのである。

中東では、水が豊かさを現わし、その象徴である。乗組員の交代で宿泊したドバイ、現在では世界一高いビルが建つあの街は、たくましく生きるベドウィンを思わせる砂漠の中の小さな街であった。今や、世界一を競う高層ビルが立ち並ぶ大都会と巨万の富を築いたアラブの大富豪が、贅を尽くす生活を営んでいる情景をテレビで観ることがある、自ずと40年前の砂漠の中の小さな街を回想してしまうのである。そして日本と湾岸諸国を行き来する途中で寄港する東アジア、東南アジア諸国の貧困、今ではすっかり情景が変わっているようだが、ところを変えて人間に、しばしば堪えがたい苦難を強いている。

機械の仕事ならば水を得た魚のようなわたしは、次第に世の中の濁流に飲まれていったような年月を過ごしていた。最後に配乗された船は12万トンのタンカーであった。追浜で定期点検のためドックに入る約1週間から、タンクの底にたまった原油の汚泥を汲み取るための仕事を請け負った一団のグループが乗ってきた。三交代で夜も徹しての相当に過酷な労働だ。そんなある日の事である、直径約10センチ長さ1メートルくらいのシンダー・ポンプが「スコッ、コン」という音とともに上下するのに合わせて、ある中年の作業員が楽しげにみえたのだが、身体を上下させていた。それまであまり接したことがなかったが、知的な障がいを負っていたことはすぐに分かった。原油の汚泥を汲み取る仕事は、ともしんどい仕事であり、別の作業員に日当や、どこからやって来たのかを尋ねると、会社が支給するはずの額の3分の1程度の日当で「寿街」だと答えた。なぜか記憶が残っているが、当時は何のことだか知り知らない他人事だった。

そんな経験を刻みながら、わたしの中で多国間経済の謎解きがはじまっていた。小学校の社会科で教わった「日本は貿易立国である」という言葉が意味する現実社会が、目の前に繰り広げられているのだ、と。

わずか4年に満たない年月だったが、この時期の経験を、とおして、今にして振り返ると、時代は、脱「構築」などという言葉が流布しており、既成の枠組みから脱却することがひとつの思想的な潮流であったのかと今思われる、それも構造や制度的に社会を観ることの枠内にいるゆえであり、今に至るまでそういう時代制約にある思考パターンの中で、専らこだわり続けることへの導引となったのである。しかしあれから40年の歳月を経た今では、限界を感じている。行き着いた結論は、教育と人間の認識に関わる問題であるということだ。これについては現在進行中なので、最後にもう一度ふれたい。

数年の後、身近な関わりにおいて問題を抱え、心身共に疲れ切り、職を辞して、

わたしは自らの生き方を模索した。特に経済関係においては、他者を搾取しない(加害者にならない)、されない(被害者にならない)生き方、自分自身に人間性の回復と豊かさをもたらす生き方が、農にあるということを徐々に知らされていった。それは、同時期に偶然、教会をとおして、有機農業をいとなむ友人<sup>3)</sup>との出会いにはじまったことでもあり、農に関わりつづけるという姿勢が40年を経た現在にまで至っている。彼は、教会にやって来て、礼拝後に、玄関の傍らにゴザを敷いて自分の野菜を売っていた。ある時、JR香椎の駅前で露店に誘われ、いっしょにゴザを敷いて野菜を売ったものだ。「露店も大変なんよ、ヤクザにシヨバ代を要求されたり、…農家は、野菜を育てるのは何とかなるんよ、問題は、どうやって売るか」と農家業の勘所を教えていただくなどしたのだった。

他方で教会については、離れて後ちょうど10年の放蕩の歳月を経て立ち返ったのであった。当初、わたしの中では、教会と農はまったく無関係にそれぞれ独立したものだだったが、その後の予期せぬ出会いをとおして、図らずも両者が無関係なものではなく関連していることに気がつかされ理解を深めていくことになる。当時出会ったふたりの牧師たちに、その対照的な志向をもって、影響を与えられた。そのうちのひとつは、カルヴァンの「キリスト教綱要」の読書会をとおしてのものであり、もうひとつは、元来、文献学的な志向をもっておられたが、1986年、九州教区が宣教協約を結んでいたフィリピンに宣教師として、派遣されたことをもってその神学的な志向の変遷がうかがい知れる。後者の牧師を訪ねて、2ヶ月ほどミンダナオ島西北部のミサミス州に滞在させていただいた。そこでの記憶も未だ鮮明だ。

あるとき、フィリピン・キリスト教協議会の主催でミンダナオ島の山岳地域の先住民族の集会に参加の機を得た。マルコス大統領からアキノ大統領に政権が代わって間もない頃であったが、ヴィジランテ(自警団)はアキノ政権になってますます暴徒化していた、特にミンダナオ島では跋扈跳梁の状態であったと聞いた。土地の人たちは、「まだマルコスの時代の方がよかった」としきりに言っていたものだった。

その集会后、山の中の小さな村で牧師(女性)を務めていた方に、自らの村と教会を案内された。コブラがでる山の中を裸足で歩き回り、焼き討ちされた民家を見せていただいたりなどした。文字通り身体を張っての牧会をなさる、物静かな佇まいに言葉以上の力を体中から漲らせておられた。この牧師が、村の人たちの生活とご自身の生活、その牧会には乖離がないような印象を受けた。簡易に建

てられた小屋のような牧師館・家の執務部屋に案内された、一つしかない小さな本棚にあった本は、いずれも日本の新書版くらいのもので、中にジリー・グラハムの本が目にとまった。牧会の様子をうかがって日本ではさしずめ社会派と呼ばれても違和感のないこの牧師が、保守と呼ばれるのか革新と呼ばれるのか、そんなことは、一切意に介することなく、わたしたちが、見失いがちな大切な何かを掌に握りしめて、遠い記憶から今も、わたしに問いかけ続けている。

この事例をもって、神学の何を学ぶか以上に、「貧しいものは幸いである」という言葉が、特に「幸い」という言葉が、微妙な響きをもって、今も自戒的に聞こえてくる。他にも紹介したい事例はあるが、今、あの30年余りの当時を振り返ると、その後、神学校で学ぶ際に、出会った解放の神学からの言葉、“doing theology”は、伝統的な言葉「説教と牧会」から自ずと導かれるものだと、確信するのである。

## 2. 教会外の宣教活動

神学校を卒業後、恩師星野正興先生の紹介によりアジア学院及び道北クリスチャンセンターに務めを得た。前者は日本基督教団年鑑によれば関係学校であり、後者は関係団体（その他）である。「関係」とは日本基督教団との関係である。アジア学院では、若さゆえ可能であったのだが、非常勤講師として野菜部門の担当を申し出て、寛大にも受け入れてくださった。これも今振り返ると赤面ものだ。農に関しては十分な知見がなかったわたしには当初は苦かったのだが、年月を経るほどに発酵するかのような経験をもってその年は厳しくもよき学びの年となった。その1993年は、記録的な冷夏により米が不足し、タイから米を輸入する年となった。野菜も、特に暑さが必要なトマトやナスなどの果菜の成りが悪かった。困り果てて、近くにある篤農家の畑に植えられていたトマトを、勉強のためにじっと眺めていると、泥棒と間違えられたのであった。研修生たちもそんなわたしの困惑を察していたようだ。ある時、ネパールからの研修生ラトナさんが、田畑の傍らに自生している食べることができる数々の野草を教えてくれたのだった。作物を育てるだけが農ではないと教えられ、本当に脱帽ものだ。研修のために来ている彼女から教えを受けるという経験は忘れがたいものとなった。

研修生を意味する言葉として、アジア学院では participant（参加者）を用いるが、言い得て妙である。これは「解放の教育学」でパウロ・フレイレが論じているバンキング・コンセプト（知識、技能を蓄積、習得した教育する者が、教育される者に対して、上から下に一方的に教える教育法）が技術・知の領域ではものを



いうが、技術においても、人格的には個々人が尊厳を損なわれることなく、安心が保障されていることが教育では必ず双方向的であることをうまく言い当てていると思う。

アジア学院のコミュニティ形成理念は、「共に生きる」であり、その中心に「食生活」がある。理念が観念にとどまることなく、現実化されることが、現代の産業化、分業化された社会では、求められている。例えば「身体性」という言葉は、随所で論ぜられるが、この言葉については、どんなに崇高な理念であろうとも、それは脳内活動による音声や文字だけであり、かえって虚無感を響かせることにならないだろうか。対極において、たとえ言葉において、稚拙、不十分であっても実践する個人、共同体が人々の関心を惹きつけるのだらう。次のような事例を思い起こす。

アジア学院で働き始めてすぐに、旧植民地国出身の研修生が、朝のフードライフワーク（当時はチャオといった）の時間に校長がトイレの掃除をしているのを見て、驚くということを経路の先輩職員から聞いた。チャオというのはchoreで、「家庭や農場での決まり切った退屈で価値のない仕事」というようなニュアンスがあるので、後にあらためられたそうだ。掃除という大切な仕事が、家庭、学校の掃除当番、社会では清掃業がいかなる価値観を付されているだろうか？それを組織の長が率先して取り組むことが共同体形成にとっていかに肝要なことであろうか。他に制度的に根付いていることで注目すべきは、残飯である。これは、毎食後、係が堆肥場に運ぶ事になっている。残飯はゴミではなく、土となって再び命をつなぐ、還元が自然界ではとても大切なことなみである。

消費社会ではこれがゴミ問題などに集積される。原子力利用の技術において、特に再処理を含めて廃棄物処理の問題などは、解決策がないままにエネルギー利用、つまり消費だけが先行されている。しかしどんな科学技術にもかならず恩恵と犠牲がともなう。プルトニウムひとつをとっても2万年以上先にまでツケを残して恩恵だけを追い求めているわたしたちは、後の世代に愚かな人たちだったと言われまいだろうか。熱力学の法則に生身の人間を顧慮するだけで十分だが、エネルギー消費が低いほど、人間を含む環境への負担が少ないことは自明である。代替エネルギーなどが論じられているが、エネルギーを含む消費そのものを下げていくような取り組みが必要ではないか、譲歩するというならば、少なくともウランを無害化する微生物の研究などが進められるなど、エネルギー利用を国が技術の研究開発を率先して進めるならば、まず核のゴミ問題に国が見通しを立てて後、

エネルギー利用の計画を立案すべきだというのが私見である。

環境の問題は、すなわち廃棄物、ゴミの問題であると言いかえても差し支えないだろう。大量のエネルギーを消費する。生態系に負担の少ない生き方を、幼少期から経験的に学ぶことができるような教育の改革が必要であると痛感している。「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」ロバート・フルガム著／池央詠訳をお読みいただきたい。

今日では「教育」に「共育」という字を当てることがあるのも、つまり、ひろく人間関係全般において、固定的な制度上の枠組みは、暫定的なものであったり、便宜的なものであることを意味する。人間関係は、本質的なところで双方向的な関係でなければ、人間どうし、互いに対象化し、無機的に評価し、人間疎外が常態化してしまう。他方では、キリスト教の修道制や先住民族の文化にあるように経験を積んだ者による一世代では到達不可能な知恵や技能は、単に外的な制度にとどまらない人格的交流をととして教えていただかなければ伝授されないものだ。

いずれにせよ、身体的物質的にのみに恩恵を求めて生命活動を維持することは、知力、能力、あらゆる基準において優れた者に高い価値が認められる。それはすべての人間集団においてである、例外はない。それゆえ、集団の中で個々の人間に価値の序列が付されるようになるだろう。

言いかえるなら、人間が集団を形成する際に、価値の序列が制度的に固定化され、宣教においては、ここに倫理的な問題が生じるならば、それが次第に顕在化していくのである。宣教においては、派遣する主体があり、そこに権威がある。他方で派遣された人を受け入れる客体が、構造的に不可視ながらできあがる。<sup>iii)</sup> この価値序列が社会制度的に固定化されるようになった起源をたどると、私見では、紀元前の農耕の歴史、文明の起こりにまで行き着くということにまで、遡っていく。

他方キリスト教宣教の領域から深めていくならば、次の観点が重要になるだろう。すなわち、宣教において派遣主体の権威は、キリスト教の場合において特異である。なぜなら、その中心にあるのはイエスの十字架であり、「人間の本性とは相反するものであり、自然なものではない」からだ。(ボッシュ、前掲書下 431 頁以下)

### 3. 教会の宣教

1998年春から、またも恩師星野先生の紹介により、岐阜県の中山間地にある田瀬教会に任を与えられ遣わされた。日本の教会では珍しく教会員の多数が農民で



ある。江戸時代からつづく農家、開拓で入植した農家、幼少期に満州開拓で入植し、戦後、郷里に戻った農家、義務教育を終わり紡績工場に勤めを得て離れ、結婚して郷里に戻った方、あるいは熊本出身で、青年期に南米に家族で入植した経験を持つ、Aさんがいた。かつて、日本が、日系人からはじめ外国籍の人々に就労を許可し始めて、故国日本に戻ってきたのである。Aさんの身の上話をうかがった折に、自伝として書き残すことを勧めたが、かなわなかった。山林の仕事に携わっておられた教会員とともに日々南木曾の山での仕事に従事されていた、高齢になり仕事を退かれ、ブラジルに戻られたが、自動車事故で召されたと伝え聞いた。彼は、日本からの開拓団に、家族で入って、開拓すれば自分の土地になるという政策の元で、移民団とともにアマゾン川を上っていくが、度重なる苦難の末、絶望して、ある時、自死を決意された。密林の山奥に分け入って死に場を求め、たどり着いた山の頂にキリスト教会があった。彼は死ぬことを断念して、文字通り信仰者として生まれ変わられた。

農村にある教会では、だれもが、農業とは切っても切れない関係にあったが、共通項は「貧困」である。この貧困が、時折、経験談に語られ、人々の生活感の中に、言葉として発せられることなく、深く刻み込まれていたといっても差し支えないだろう。

この田瀬教会は、岐阜県の東濃地方の長野県寄り、馬籠宿までクルマで30分程度の中山間地の小高い丘に位置し、戦後は栗の栽培が行われたが、傾斜地の厳しい条件ゆえ、放棄されて萱の繁る共有地とされ利用されていたところだ。ちなみに当時の牧師館は、簡易な屋根をふいたり、壁を打ち破るなどして栗の選別小屋を自前で改造したものだった。毎日がキャンプのようであった。風呂は戸外にひとつ、数<sup>キ</sup>。上流から引いてきた沢水を使うが、雨の日には濁流となり、水が茶色になるので、井戸水をくみ上げた屋内のものを利用していった。

数百<sup>キ</sup>東には開拓地があり、開拓者としてこの地に入り、営農する教会員の親子孫3世代からなる家族がナスの栽培、酪農を営んでいた。ここの地名は、「大萱」といわれるように萱が生い茂っていた手のつけようがない荒地地だったのだろう、この地域の人たちが総出で、用水路を地域総出で掘り進めていく際に、丘の下の集落にも共同で作業を呼びかけたが、応じなかったという。そのために、できあがった用水路の利用権は与えられず、後に利用を申し出てきたが、拒否されつづけていた。当時にして、50年の後までも引き継がれる水問題の一例である。

北海道でも瀬棚の生出正美さんをはじめ開拓農家の方々との出会い、最近では

中村哲さんの著書や映像を見たり聞いたりする限りでも、その労苦は筆舌には尽くせないことを、まずお断りしておく。

その前提で、農耕文明の発展プロセスを追ってみると、氏族制社会から、少数者による支配へと移行し、王朝が起り都市国家文明が起こっていくことに焦点を当てる。この過程を考える際には、灌漑施設が、その大きな転換点にある。ひとりではできないこの大事業を進めるために、神官が神の代弁者として、灌漑事業を統括指導のもとになされるのである（「古代オリエントの歴史」小川英雄著、20頁）。

人間が共同体を形成し、発展するためには、少数、あるいはひとりの指導者が自ずと出てくるようだ。共同体から指導者に求められるのは、発せられる指導の適正さである。指導者はだから、身体能力は二の次で、より知性に優れた者が、指導する者となる。知性とは環境をはじめ諸条件を読み取る力である。知性（大脳）が、身体（集団）を動かすのである。

後にもふれるが、古代社会では、宗教が、科学と技術はもとより、法制面、集団を統制し、共同体を維持する要となっていた。自ずと豊穰を祈願する宗教なのである。その共同体はいわゆるピラミッド型社会をもってしか形成、維持され得ないのだが、その原型と「イエスの十字架」は一線を画している。

蛇足であり、仏教者の方には甚だ僭越ながら、かつてナチスは「逆まんじ」を象徴とした。これは知恵と力を象徴する。それと対をなす「まんじ」は慈しみと愛である。知恵と力はい方を誤ると人を滅びに導くのである。今や欧州に僧侶が宣教師として派遣される時代である。神学教育には、慈しみと愛以上に知恵と力を重視する傾向を内在しているようだ、自己批判もあわせて逡巡する次第である。

東濃地方の精神的な環境を紹介するために、行政報に掲載されていた昔話をあげる。この地域一帯が、廃仏毀釈で神道色の強い地域であることがうかがい知れた。強欲な寺の住職が、地域の農民に袋だたきに会うという話であった。つまり村の中では、最も教養があり、お布施や葬儀などにより生活の糧を得ている宗教者が傲慢であることがいかに、憎しみをかうかという問題がこの話に込められている。

さて、キリスト教会はどうだろうか？おなじ類いの事実談を今はなき隣町の当時の牧師から聞いた。明治期に名古屋の大きな教会から伝道のために派遣された牧師が、ある時街の人から少額の献金を献げようと申し出られた、ところが「そんなハシタ金」といって受け取りを拒否したというのである。真相、詳細は定か

でないが、やはり当時にして、50年前の話である。そんな類い話が街の中で脈々と語り継がれるのである。奥羽教区でも事情はおなじであった。この問題が、特に日本基督教団にはつきまわっていることに気がつかされた。それは歴史の専門領域であるが、旧武士階級の指導者により、牽引された歴史的に培われた精神風土の問題として十分な批判を要するだろう。

その後、青森県むつ市に、派遣された。下北半島の対岸にある大畑には、原子力船むつの船体の中央部、原子炉格納部分だけが切り離されて保存されている。赴任前にここを紹介され、わたしは、感慨にふけたものだ。赴任の前日、岐阜から青森まで家族とともにクルマで移動した。遠路はるばるむつ市街に着く、日が暮れる頃、クルマでガソリンスタンドに寄ったところ、店員から、「自衛隊さんですか、原子力関係ですか？」と尋ねられ、得意客の勧誘かと思いつつ「いえ、田名部教会に…、田名部幼稚園に…」と応えたところ「ここには何もないよ、」といわれ、戸惑ったものだ。これとおなじ言葉を、後に、教会のお茶の時間に、ある教会員が笑い混じりにつぶやいた、「ここには何もないよ、…ゲンバツはいっぱいあるけど」。あるいは高齢の女性会員が、「若い頃、週末には大湊の駅から若い女性を乗せた汽車が出ていたよ…」この奥羽の歴史だけでも専門的に掘り下げる必要がある。ある時教会員に縁故のある、丹波地方など牛で名の知られた農村に出かけて行って技術を習得して下北地域に短角牛を導入された篤農家を訪ねた折のことである、多忙な中でそこそこに暇乞いをしようとしたところ、「お茶っさもせねえで、何事だ！」と声を荒げて引き留められた。お茶をすすりながら、「わしらの幼い頃、この地域ではこどもたちが、あっちの家からこっちの家さにたらい回しにさせられていた…」と貧しさの極みにあった頃の事を教えて頂いた。これは昭和初期の冷害による凶作当時のことだと後で知ることになる。

それでは、なぜ下北半島には、大湊に海上自衛隊の要衝、大畑には現在使用済み核燃料の中間貯蔵施設、北端の大間、東通村、大畑、六ヶ所村に数々の原子力施設を積極的に導入するようになったのか、この地方の歴史を市民図書館でひもとくと、近現代においては、貧しさが背景に厳然とあることと、併存するのが、坂上田村麻呂が登場する民話にまで時代をさかのぼることになった。縄文文化と弥生文化の問題は、とりわけ奥羽地方の東部一帯、青森県から岩手県あたりまでを覆う。例えば、興部（おこっぺ）、平内（ひらない）や田子（たっこ）というアイヌの地名が残っている。三内丸山遺跡の三内（さんない）などは、アイヌ文化を残している。あのねぶた祭は、坂上田村麻呂がアイヌの「征伐」をもって祝う

祭なのだ。弘前のねぶたは、出征する時、青森のものは凱旋を記念する祭だという。何とも複雑な思いに駆られるのである。

歴史は風土を作るが、明治以後の近現代史において共通項が、またも「貧困」である。奥羽・東北の地域については、貧困とそれとともない人間が商品化される問題、あるいは貧困においても豊かな状況において、不可視的に経済価値としての対象化が起こる。人間に非人間化が起こる問題<sup>iv)</sup>を「窮乏の農村」(猪津股津南雄著、岩波文庫)、「昭和、東北大凶作」(山下文男著、無明舎出版)などが歴史社会的に述べている。

かなり仔細に農村の困窮を書きとどめる史実を後者から2つほど紹介する。

帰っても村には飢えが待つばかり——最近、東京・吉原の遊郭で、年期明けの娼妓のうち、さらに一年か二年の短期契約をやって稼ぐ者が目立って増えているというので、何が原因かを調べてみたら、その大部分は、年期があけて田舎に帰っても食うことができない、まだ遊郭にいた方がましだということらしい。先頃、東北のある連隊である兵士に帰休を許そうとしたら、家に帰っても仕事はないし、軍事救護が打ち切られては、家族が餓死するから、このままおいてもらいたいと懇願されたという話があったそうだが、この話とともに、近頃の農村の疲弊を語って余りある。(「昭和、東北大凶作」、88頁)

「東北地方特に山形県下は昔から娼妓を各地に送り出す地方として有名であるが全国に廃娼運動が高唱されている折り柄、この一、二年間に娼妓に売られた年頃の娘が急激に増加し、わずか九万四千の人口を持つ最上郡だけで、現在二千人の娼妓を各地に送り出し、ある村の如きは嫁入り盛りの乙女の姿が村から消え去ったという悲痛事が伝えられ、由々しい社会問題として各方面から憂慮されている」云々。

このように厳しい貧しさが、昭和初期の東北、奥羽、北海道の各地を覆っていた。演歌に「上野駅の夜行列車…」という歌を聴くと、当地から出稼ぎに上京した人たちは、郷里に対して抱く複雑な思いに駆られるのだろう。

このような貧困をもたらした一因に、明治以後の政治が深く関与している。田名部教会時代に通ってきていた改良普及員を務めていた青森県西部出身の(当時)青年が、「青森県の知事職は、代々薩長出身者が中央に上る足代代わりにされていた。だから青森の農政は、ガタガタである」というような趣旨を漏らしていた。

地域を知らない者が地域の指導者となる、当然といえば当然だが、教会もわたし自身も他人事ではない。

いつだったか記憶していないが、教区のある講演で、奥州街道は、一揆が全国で最も激しかったという。それは武力で鎮圧された。奥羽、東北が保守的だと巷でいわれることがあるが、他者によって保守的にされた側面があると観ている。あるいはまた、東日本大震災における東電の原発事故にもなって、各地の立地地域から大きな声が発せられないことに、胸中複雑である。これについて、より学的には、後述する工藤昭彦さん（東北大学大学院）により知ることとなった。

教会がこのような歴史をたどってきた地に建てられ、宣教するが、意図するしないにかかわらず、少なくとも近現代史だけは、いや日本史を民衆史的、同時に先住民族の観点から、しっかりと踏まえて、いや無理だ、地域に入っていくならば、しばらくは、地域をある程度は？、どの程度かが難しいが、分かるようになって、…わたしは神学校であらたな地域に赴任したら図書館の地元の歴史を学ぶなどしてくださいと勧める、…それを踏まえて実践されなければならないと痛感する次第である。

さて上述の、工藤昭彦さんを知ったのは、奥羽教区時代に参加していた、「農村伝道推進協議会」による。工藤さんは、当時すでに「現代日本農業の根本問題」を著わしておられた。後にこの著書を読んで、その時の講演がこの著書にまとめられていることを知った。アジア学院時代にタイから米が輸入されたことを驚いた記憶を学的に追体験するのであった。また青森県が、全国で沖縄県との間で貧しさの一、二位を交互しながら占めていた、なぜ食を供給する農村が、いつも貧しさに絡みとられるのか、その社会・制度的なからくりがあきらかになったのである。

その後「資本主義と農業 —— 世界恐慌・ファシズム体制・農業問題」を呈されて、むさぼり読んだ、上記の諸処の問題に風穴が開けられたようだった。

いつの時代も同様のことがいえるが、新しい政権が出現すると、その政権は、前政権を批判する社会観や歴史観を浸透させようとする。わたしの記憶では、明治に入って身分制は廃止され平等な社会が実現していったというものである。対極に江戸時代は、身分制が敷かれており、農民は武士階級の次に位置づけられながら、貧しさを強いられていたと教わった。江戸時代とは、暗いイメージが浸透していた。

しかしそれは明治期に入ってつくられた歴史観であることに気がつかされた。

そもそも、江戸時代は、米の収穫が藩の大きさを示す指標なので、過酷な年貢を取り立てて農民を虐げるなら、収穫は落ちていくことが自明だろう。

現代でも環境問題をはじめ東洋、日本の伝統技術が見直されてきている。アフガンで灌漑事業に取り組んだ中村哲さんは、柳川に残された江戸時代の技術を用いたのだった。現在、農村伝道神学校では、坂田昌子さん（環境 NGO 慶十の会代表、一般社団法人コモンフォレスト・ジャパン理事、生物多様性ネイチャーガイド、古書げんせん館店主）の指導を仰いで江戸時代の技術であるシガラを組むなどにより、疲弊している環境を回復させるために職員の松本吉氏光さんが主導的に取り組みはじめたところだ。工藤さんの著作は学術的だが、読みやすいものとしては、鈴木亘弘さん（東京大学大学院）による「このままでは飢える！」（講談社）など警鐘を鳴らす方々はわたしのおよび知らないところで多くおられるのだろう。

さて工藤さんの著作による、要点のひとつは、例えば、小農が危機に陥る、地主小作の関係も崩壊に追いやられるのは、富国强兵策を勧めるために地租改正を行い地主の投資を工業に転ずるように誘導することによることである。かたや、農業がもつ本来的な制約、それは予測困難な自然環境を相手に営む産業の本質によると主張するのである。そして、資本主義が包摂できない農業は「農業問題」となって顕在化する。工藤さんによる「農業問題」とは、小農経営が支配的な産業であるという前提に立って、「資本主義の矛盾が解決困難な様相をともなって政治問題化する」という意味で論を進めるのである。農業問題を資本主義が掌中に収めきれなくなると、強制力をもって鎮圧するのである。つまりファシズムが頭をもたげるのである。

（「資本主義と農業」19頁他）専門的な領域での検証を望む方には、著書に当たってもらいたい。

本質的におなじことを鈴木亘弘さんは、上掲書の中で「農業危機は亡国政治による人災」という。これは前述のように明治以来、この国に一貫して広められた、産業化政策の延長上にある。わたしたちの記憶に新しい、2014年のバター不足から、乳量を増やせ、という声が高まった。「牛を増やせば補助金を出す」と、増産体制をうながす。コロナ禍で外食産業が落ち込むとだぶつきがはじまり、2021年には「牛を殺せば補助金を出す」と言い始めたのである。（上掲書、74頁以後）何という愚策か。



#### 4. 産業化と文明の起源、農の原罪と共同体形成のための考察

明治期の富国強兵策は日本における「産業化」のはじまりであるといつてよいだろう。この産業化の問題は、現代においては、エーリヒ・フロムによって論じられている。産業化の問題については「18世紀にヨーロッパで起こった産業革命により、…」とされている。産業革命は、人間が、環境の中から、石炭を燃焼することによりエネルギーを変換することを可能にした機関を発明したことに象徴される。これを言いかえると、身体を生活に順応させるのではなく、願望、欲望を実現すること、環境を変えていくことを、蒸気機関の発明によりそれまで以前よりも桁違いな規模で可能にしたのである。ちなみにこの時代以後、石炭エネルギーの利用が飛躍的に増大していることは、産業革命が今日の環境破壊への道を拓いたといつてよいだろう。

この産業化の定義をもって、その核心にある問題は、人間が自分以外の他者を変えていく技術的な手段の確立である。あるいは、人間が、自らが変わり順応するのではなく、他者を対象化し変えていくことが生活のいとなみにおいて常態化した社会変革であるといえる。<sup>v)</sup> 農村から都市へ人が移動したことは明治期の日本とも共通している。

既に専門用語があるのかは与り知らないが「発展」という概念をもって、論考を続けることにする。発展と呼べる概念が、人間の文明の展開に通底しており、それがもたらしてくれる恩恵、負債とみなす基準そのものである。これが問いの組上に載せられなければならない危機感を近年の環境破壊などの問題をとおして自覚されるべきではないか。

先に、「宣教において派遣主体の権威は、キリスト教の場合において特異である。なぜなら、その中心にあるのはイエスの十字架であり、『人間の本性とは相反するものであり、自然なものではない（ポッシュ、前掲書下431頁）』と論じた。ポッシュがいうところの「人間の本性」とは、この草稿においては「発展」と同義であると解したい。宣教に関する基点が、「イエスの十字架」であるならば、例えば、「貧しいものは幸いである」などの不可解だとみなされやすい言葉は、次のように解せるだろう。「発展」により、生の脅威、犠牲を強いられる人たちがいる。その対極にいる恩恵に与る人たちは、身体の永遠性を願い、豊穡の道を追い求めながら、同時に祝福に与る対象ではない。むしろ犠牲を強いられている人たちこそが、祝福を受けるのである。

そうであるならば、「発展」を追い求め祝福から漏れる者に対しては、祝福に与



るためには回心が求められる。その回心とは、いったいいかようなものなのか。ひと言でいうならば、「発展」から「イエスの十字架」への生きる基準の価値転換である。

そこで「発展」について考えてみる。「発展」、文明の起源をたどるために、一入手しやすい書物をたよりにする以外に手立てがなかったのだが、— 西アジアにおいて起こった農耕文明にまで行き着いた。原始民主制度から、氏族制度的共同体の形成へと移り変わり、都市国家が形成されていったとされる文明の起りであるといつてよいだろう。<sup>vi)</sup> 古代のメソポタミアで農耕のいとなみをはじめられた時にすでに人間による人間の疎外の萌芽がある。農の起源は、暦、気象、土地、数学など今日でいう自然科学・技術と、その起源から結びついている。

メソポタミアの都市国家の最たる特徴は、ひとりの手に権力が集中する、都市国家どうしが戦争を繰り返して併合されていくというものである。その決定的な転換点が灌漑施設だといわれる。大勢の人たちが、自発的にせよ、強制的にせよ、必要となる。神殿など都市の建築についても、おなじである。街の中央には神殿があり、都市に帰属するすべての人たちの精神的な要となるのである。発掘により、ユダヤ教、キリスト教にはなじみ深いウルの市街は図によって公表されている。時代は紀元前 3000 年頃である。この時代までは都市と農村の明確な違いはないといわれるが、次第に強大な国家が出現したという。しかし同時に、さまざまな問題を抱えて、メソポタミアでは統一王朝は生まれなかった。（「古代オリエントの歴史」19 頁以下）

以上のような都市国家の構造を概観して、キリスト教会による共同が、その中心に「イエスの十字架」を据えるならば、そこから形成される共同体はいかなるものになるのだろうか？これについては、今ある組織神学の組上にのせるしか方法がないのだろうか。今のところ、西田幾多郎に学ぶことから始めようとあれこれ考えているところである。

## 5. おわりに

これまでふれてきたように、わたし自身は、農へのこだわりを続けると同時に、理解者にめぐまれないと思いつ込んでいた。いつしか、理解者は、既知の農民や農を支えようとする支援者だけであると自ら対話を深めることはしないようになっていた。それは、わたし自身が構造的な思考から、つい最近まで離れることがなかったこととも関係していたのだ。構造や制度の変革という方法については、

生き苦しさや嫌悪感をもよおすほどで、行き詰まっていた。ただ教育だけが解決の糸口になるのではないかとだけ、思い巡らせていた。

そうこうするうちに、2020年春からのコロナ禍において、もはや脳内だけの思考は終わりにしようと決め込んでいたところに、偶然、生命科学で著名な、福岡伸一さんによる「福岡伸一、西田幾多郎を読む—生命科学をめぐる思索の旅」に出会い、大きな転換をうながされた。西田幾多郎が、すでに西洋からの知と力に偏重した思想的な潮流にあらがっていたことに眼を開かれた思いを抱き、感謝とともに、制約の中でも微々たる歩みながら読書をはじめようという思い（にとどまる）が、沸き起こってきた次第である。そんな折に富坂の岡田仁専事に執拗に研究会への参加をうながされ、しぶしぶ承諾したところ、実践とともに粘り強く思考する方々に出会い、敬服するとともに学びの再開をうながされている。感謝深甚である。

なお、論じてきた領域は広汎に及び、それぞれの専門領域において踏まえるべき基本的な文献も考察も甚だ不十分であることは言うまでもない。実践としては、限られた条件の下で、農村伝道神学校において、考え、言葉にする、農に近づくいとなみをわずかでも維持することによって、これまでのように遅々とした歩みながらも思考は自ずと、進んで行くであろう。

〈註〉

- i 宣教という語は、中心となる主体が教会にあるという認識にもとづいた表現である。それが宣教活動に支障をもたらす要因となることがある。
- ii 彼は後に著書を出した。「ちよつと旅に出て」夢野良平著、海鳥社
- iii 「宣教のパラダイム変換」上18頁、D・ボッシュ著。
- iv 商品化されるということは人身売買にあらわれ、これは人間が商品化されているがゆえに、貧困という事態に直面して顕在化するとみるべきだろう。
- v 労働力の獲得のために、農村の囲い込み政策によって、農村から炭鉱労働のために移り住むことを余儀なくされた農民たちは、産業構造の中で、隷属的な位置に甘んじなければならなかったことは、「対象化」の具体例であるといえる。
- vi 「古代オリエントの歴史」小川英雄著、14頁以下。